様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月　 ５ 日現在

機関番号：１１３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０６６７９

研究課題名（和文）スペイン統治下の南イタリアにおける中世末期からルネサンスへの建築の変遷

研究課題名（英文）Architectural Transition from the late Middle Ages to the Renaissance under the Spanish Kingdom in South Italy

研究代表者
飛ケ谷　潤一郎（HIGAYA, Junichiro）

東北大学・工学研究科・准教授

研究者番号：３０５０２７４４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,800,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究により、スペイン統治下（1450～1550年）のナポリやパレルモを中心とした南イタリアの建築の様式変遷については、15世紀には主にフィレンツェの影響、16世紀には主にローマの影響といった従来の説に加え、イスラームやゴシックの伝統が残存するスペイン王国（ないしはアラゴン王国）の様式変遷との類似性も見られることが示された。ただし、スペインとともに大航海時代の主役として競い合っていたポルトガルとの関係については今後の課題としたい。というのも、15世紀末のスペインとポルトガルの建築様式にはいずれも二次元的な装飾過多という特徴が見られるからである。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　16世紀のイベリア半島の国々は、当時の日本とも少なからぬ関わりがあり、世界史的な観点からは従来の建築史編纂で重視されてきたアルプス以北の国々よりも積極的に取り上げられるべきと考えられる。本研究の学術的意義はその一助となることをめざしたものであり、社会的意義についてみても、たとえば16世紀後半のイル・ジェズ聖堂の形式がアジアや中南米にまで普及したように、長崎と天草の潜伏キリシタン関連遺産を考える上でも、大航海時代の担い手であったスペインとポルトガルの果たした役割は重要である。

研究成果の概要（英文）：　It has been proposed that the Renaissance architecture of South Italy, such as Naples and Palermo, was influenced by that of Florence and Rome. In this study however we could find another design source from Spanish (or Aragonese) architecture, where medieval tradition, such as Islam and Gothic, remained, because South Italy was under the Spanish Kingdom and cultural exchange between two regions was observed at that time. We would like to go on to develop these theories by extending our researches to Portugal, which had been in rivalry with Spain in the Age of Discovery, because excessive decoration was common to both architectural style in the end of the fifteenth century.

研究分野：建築学

キーワード：南イタリア　スペイン　ルネサンス　庭園　建築書

１．研究開始当初の背景

15 世紀初期にフィレンツェで発生したルネサンス建築は、15 世紀末期には北イタリアのミラノやヴェネツィア、そして南イタリアではナポリにまで伝播されてゆく。しかし、北イタリアの初期ルネサンス建築には地元の中世建築の影響も少なからず見られ、このことは南イタリアの場合にも当てはまると思われるが、当時の南イタリアはすでにアラゴン家の統治下にあったため、スペインとの関係についても考慮する必要がある。当時においても諸外国からイタリア半島はひとつのまとまりと見なされてはいたものの、南イタリアに関しては近代の国民国家的な分類に従って、イタリアとスペインとで単純に区別することは不可能である。

本研究の対象となる南イタリアのルネサンス建築は、フィレンツェやローマに見られる巨匠の名作とは異なり、設計者名が知られているものについてみても、むしろゴシックの工匠による作品として分類したくなるかもしれない。南イタリアのルネサンス建築が傍流に属することは確かであるが、同地の古代・中世建築の質と量に関しては目を見張るものがある。というのも、南イタリアは太古から近世にいたるまで多くの民族に支配されてきた歴史をもち、とりわけ中世にはアラブ、ノルマン、ホーエンシュタウフェン（ドイツ）、アンジュー（フランス）といった目まぐるしい支配者の交代によってさまざまな様式が登場するに至り、アラゴン家の統治時代よりも前から各地の伝統が根強く残されているのが特徴である。すなわち、南イタリアのルネサンス建築は、ゴシック建築からの変遷という西洋建築史の本流には当てはまらないがゆえに、特殊な事例として処理されてしまいがちなのである。

２．研究の目的

実際に南イタリアの建築を見ると、15～16 世紀のルネサンスの事例が少なく、17 世紀になってゴシックからいきなりバロックへと移行したような印象を抱くことも少なくない。けれども、当時の南イタリアではこうした一昔前のような建築であっても、細部には最新の様式が導入されており、現在に至っても都市景観には欠かせぬ貴重な存在となっている。少なくとも地元の人々からは一級の作品と評価され親しまれていることは強調されねばならない。海外における先行研究についてみると、ナポリのルネサンス建築は別としても、地元の研究者による個別の事例研究は進んではいるものの、スペインとの関係を考慮しながらイタリア中南部の全体像を提示しようという試みは、今世紀になってからようやく始まったばかりである。

そこで本研究では、ルネサンス以前の古代・中世から重層する諸外国の様式を分析しながら、南イタリアとスペインに共通する何らかの特徴を提示してみたいと思う。なお、ルネサンスやバロックといった近世建築を中世建築との関係から広く再検討した試みとしては、ジョルジョ・シモンチーニ編の論文集 La tradizione medieval nell’archi- tettura italiana dal XV al XVIII secolo, ed. by G. Simoncini, Firenze, 1992 と Presenze medievali nell’architettura di età moderna e contemporanea, ed. by G. Simoncini, Milano, 1997 があげられる程度であり、イタリア各地の代表例が紹介されたにとどまっている。またスペインとの関係についてみても、チェーザレ・クンダリ編の報告書 L’archi- tettura di età aragonese nell’Italia centro-meridionale, ed. by C. Cundari, Roma, 2007 で網羅的に多くの事例が紹介されているが、課題となる点はまだ多く残されている。

３．研究の方法

本研究の期間は 3 年で、1 年目には 15 世紀アラゴン王国（首都サラゴサ）の時代、2 年目には 16 世紀スペイン王国（首都マドリード）の時代を対象に、南イタリアのルネサンス建築との関連性からスペイン中世末期から近世初期までの建築を調査する。それらの成果を踏まえて、最後の 3 年目には、すでに調査済みの南イタリアのルネサンス建築の全体像をまとめる作業に取り掛かる。調査方法と考察の対象については次の「研究計画・方法」の欄で説明するが、ルネサンス建築に見られる地元やスペインの中世的な要素を抽出しながら、それを決定した建築家と依頼主との関係について考察する。

研究の計画と方法については、研究計画・方法については、毎年 1 回スペインとイタリアで 2、3 週間程度の現地調査を行う。イタリアではすでに多くの都市を訪れており、主要な資料は大分収集できたので、本研究ではスペインでの調査に多くの時間をかけることになる。現地では建築の写真撮影や図書館・美術館での図面や絵画史料、文献史料などの収集作業につとめ、調査後にはそれらを整理・読解する作業が中心となる。年次計画として、1 年目にサラゴサを中心としたアラゴン州、2 年目にマドリードとその周辺、そして最後の 3 年目に南イタリアとの比較検討により、それらの成果を順次まとめてゆく。ビルディングタイプという点では、おもにキリスト教の聖堂建築を対象とし、中世的な要素を抽出しながら、それを決定した建築家と建築主との関係を考察してみたい。

なお、プーリア地方のルネサンス建築についてはアドリア海対岸のヴェネツィア共和国領であるダルマティア地方（現在のクロアチア）からの影響も考慮に入れる必要がある。イタリア半島西のティレニア海と、東のアドリア海という海からの視角によれば、スペイン統治下の南イタリアという括り方は適切ではないようにも予想できるが、まずは西側のスペインとの関係に着目して南イタリアのルネサンス建築を 3 年間かけて調査することによって、全体像の大部分が浮かび上がってくるものと予想される。それゆえ本研究では、東側のヴェネツィア共和国領のあるバルカン半島や、オスマン帝国との関係については考察の対象外となるが、将来的には

南イタリアのルネサンス建築と地中海世界とのつながりについても、全体像を提示できるのではないかと期待している。

４．研究成果

研究計画では現地調査の都合上、地理的な関係から１年目にサラゴサを中心としたアラゴン州、2 年目にマドリードとその周辺を見てきたが、スペインの建築様式の変遷については同時代のイタリアの場合と同様に、おおむね 15 世紀と 16 世紀で大きく分けることができる。しかしながら中世の建築についてみると、北イタリアや中部イタリアでは西洋建築史の教科書どおりのロマネスクからゴシック、そしてルネサンスといった変遷で説明できるのに対し、長いあいだアラブの支配下に置かれていたスペインではイスラーム建築の伝統がかなり長く残り続けたため、南イタリアの建築にもさまざまな様式の影響が現れた。すなわち、地理的にイタリアとスペインで分類するよりも、北部・中部イタリアと、イベリア半島・南イタリアの二つでまとめたほうが理解しやすい。こうした二分法は両者のあいだに交流があったことを否定するものではないが、前者についてはデザインの決定に著名な建築家が重要な役割を担っているのに対し、後者ではむしろ建築主の意向や地元中世の伝統のほうが大きな影響を及ぼしていると思われるので、以下ではその二点を中心に説明してゆきたい。ただし、本研究ではイベリア半島のポルトガルについては対象として取り上げることはできなかったので、今後の課題としたい。

（1）建築主の意向

①凱旋門モティーフと多層のファサード

ナポリのカステルヌオーヴォ西側正面入口の凱旋門（図 1）は、1442 年のアルフォンソ王の戦勝とナポリ入市を記念したものである。凱旋門は塔のあいだに設けられたため、ファサードは縦長の四層構成をとり、第一層と第三層に半円アーチによる開口部が設けられていることから、第二層と第四層は屋階に相当する。この凱旋門の直接の手本となったのは、プーラにある 1 世紀のセルギウスの凱旋門と考えられるが、当時ナポリ近郊のカプアに存在していた神聖ローマ皇帝フリードリヒ二世（在位 1220～50 年）の塔型門が参照された可能性も高い。凱旋門の着想源としては、スペインよりもイタリアに軍配が上がるので、アーチを積み重ねる手法については異なる建築類型からの参照された可能性があるとしても、スペインよりはむしろ地元ナポリのサン・ジョヴァンニ・カルボナーラ聖堂にあるラディスラオ王墓碑（1428 年）が第一候補にあげられる。

図 1　アルフォンソ王の凱旋門、カステルヌオーヴォ、ナポリ

この凱旋門については、従来の凱旋門にはなかったさまざまな新奇性が見られる点が注目に値する。たとえばオーダーの積み重ねについては、第一層にコリント式、第三層にイオニア式の円柱が用いられていて、通常の順序とは上下が逆になっている。また、古代ローマの凱旋門ではアーチの上には屋階が設けられ、そこには皇帝の偉業などが碑文として刻まれるのが一般的であるが、アルフォンソ王の凱旋門の屋階は彫刻装飾で豊かに飾り立てられている。それゆえ、建築家よりも彫刻家のほうがデザインの決定に大きな役割を果たしたようにも思われるが、むしろパトロンの意向が重視された結果であるといえよう。

②集中式平面とバシリカ式平面の融合

現在のグラナダ大聖堂（図 2）の敷地にはレコンキスタ以前にはモスクが存在しており、1506 年に大聖堂への建て替えが計画されたが、本格的に着工されたのは、1529 年に大聖堂の建築家としてディエゴ・デ・シロエが着任してからである。彼はゴシック様式特有の周歩廊と放射状祭室からなる内陣部をドームで覆われた円形平面にすることで、イタリア・ルネサンスの建築家が理想としていた集中式と、宗教儀式に好都合なバシリカ式との融合という課題にも見事な解答を示した。けれども、この大聖堂は当初カール五世によってスペイン王家歴代の墓所として定められたため、バシリカに墓廟としての円堂を接続する案として、エルサレムの聖墳墓聖堂が参照された可能性は高い。

図 2　グラナダ大聖堂内陣

グラナダ大堂はプラテレスコ様式に分類され、この様式は一般に銀細工のような二次元的な装飾過多が特徴である。けれども、この大聖堂内陣ではゴシックとルネサンスとの融合が三次元のレベルにまで展開されている。立面についてみても、付柱がリブまで連続していて垂直性が強調されている点はゴシック風ではあるが、ブラマンテによるパヴィア大聖堂との類似性も指

摘される。シロエはナポリに滞在していたときに、ブラマンテのルネサンス建築に刺激を受けたと考えられ、スペインと南イタリアとの関係は、本国と植民地といった一方的な主従関係ではなかったことがわかる。彼はウベダでエル・サルバドル聖堂を設計するときにも、こちらは規模が小さいため周歩廊はないが、グラナダ大聖堂と同じ形の平面を採用している。

（2）地元中世の伝統

①装飾過多と装飾の独立性

スペインの 15 世紀末から 16 世紀初期のカトリック両王の時代の建築様式は、近年では絵画と同様に「イスパノフラメンコ様式」（フランドルの影響を受けたスペインの様式）と呼ばれる。バリャドリッドのサン・パブロ聖堂ファサードがその典型例として挙げられ、彫刻装飾で建築が覆い尽くされているのが特徴である（図 3）。形態的にはまだゴシックに近いが、装飾過多という点では前述の、次の時代のプラテレスコ様式や、さらにのちのバロック期のチュリゲラ様式と共通する特徴でもあり、スペイン建築史の本流をなす様式といってもよい。

図 3　サン・パブロ聖堂ファサード、バリャドリッド

こうした構造と装飾の分離という考え方は、内部空間よりもファサードの設計で才能を発揮したアルベルティの建築にも見られる特徴ではあるものの、彼の作品が絵画的であるのに対し、イスパノフラメンコ様式やプラテレスコ様式の建築ファサードは浮彫に近い。南イタリアにおけるスペイン本国のような装飾過多のファサードの例としては、プーリア州レッチェのサンタ・クローチェ聖堂などが挙げられるが、このファサードは 17 世紀のバロックの時代に建設されたもので、16 世紀以前の類似例はほとんど見られない。一般に装飾の密度は建物の格の高さに比例すると考えられるが、北部・中部イタリアのルネサンス建築にしばしば見られるような煉瓦造の表面をスタッコで仕上げて絵画で飾り立てるという方法は南イタリアでは好まれなかった。建築家の職能や、画家、彫刻家との共同作業の問題については今後の課題としたい。

②ファサードと中庭との関係：中庭におけるオーダーの積み重ね

ルネサンスにおけるオーダーの積み重ねについては、アルベルティによるフィレンツェのパラッツォ・ルチェッライが嚆矢と見なされているように、一般にはファサードに注目が集まりがちであり、前述のアルフォンソ王の凱旋門の凱旋門もそうであったが、中庭の立面についても目を向ける必要がある。というのも、古代ローマの劇場関連施設では観客席のある内部が重要だからであり、パラッツォの中庭にはそのような役割もあるからである。

16 世紀半ばに建設されたプーリア州バルレッタのパラッツォ・デッラ・マッラ（現在のデ・ニッティス絵画館）については、ファサードの下層や正面入口にルスティカ仕上げが用いられており、南イタリアにおいてもセルリオの建築書の明らかな影響が早くから見られる興味深い例の一つである。一方、半円アーチと円柱の組み合わせによるアーケードで開放された中庭（図 4）にはオーダーの積み重ねが見られるものの、斬新なファサードに比べると 15 世紀風であり、中世のスペインや南イタリアの伝統との連続性がうかがえる。

図 4　パラッツォ・デッラ・マッラ中庭、バルレッタ

（3）むすびにかえて

南イタリアのルネサンス建築には、当時南イタリアを支配していたスペインの影響として、とりわけ建築主の意向や地元中世の伝統が反映されている。本研究では、ポルトガルの建築については調査することはできなかったものの、たとえばスペインのエル・エスコリアル修道院にも影響を及ぼしたといわれる 16 世紀半ばに改築されたトマールのクリスト修道院回廊には、ローマの盛期ルネサンス建築との類似性がうかがわれる。この場合には、当時のヨーロッパ各国に知られていたセルリオの建築書が参照されたと考えられ、16 世紀後半になるともはや地元中世の伝統はあまり見られなくなる。イベリア半島では政治的にはスペインが主で、ポルトガ

ルが従という関係が成り立つかもしれないが、建築文化の面では必ずしもそうとは限らない。今後は両国の中世からルネサンスへの建築様式の変遷や地域ごとのちがいについても比較検討しつつ、ルネサンス様式の伝播について考察を深めてゆきたい。

＜引用文献＞

① *La tradizione medieval nell'architettura italiana dal XV al XVIII secolo*, ed. by G. Simoncini, Firenze, 1992.
② *Presenze medievali nell'architettura di età moderna e contemporanea*, ed. by G. Simoncini, Milano, 1997.
③ *L'architettura di età aragonese nell'Italia centro- meridionale*, ed. by C. Cundari, Roma, 2007.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　0 件）

〔学会発表〕（計 2 件）

① 飛ヶ谷潤一郎、ブルネレスキのドームとフィレンツェの洗礼堂天井画に見られるキボリウムとの関係について、 日本建築学会大会：建築歴史・意匠、2018 年 9 月 6 日、東北大学（仙台市）

② 飛ヶ谷潤一郎、セルリオの建築書『第五書』の宗教建築の礼拝堂について、日本建築学会大会：建築歴史・意匠、2017 年 9 月 1 日、広島大学（広島市）

〔図書〕（計　3 件）

① 飛ヶ谷潤一郎翻訳・解題「ミケーレ・サンミケーリ」「バスティアーノ・ダ・サンガッロ」、ジョルジョ・ヴァザーリ、美術家列伝、森田義之、越川倫明、甲斐教行、宮下規久朗、高梨光正監修、第 5 巻、中央公論美術出版、2017 年、121-151、175-197、全 244 頁

③ 飛ヶ谷潤一郎翻訳・解題「フラ・ジョコンド」「アントニオ・ダ・サンガッロ・イル・ジョーヴァネ」「バッチョ・ダーニョロ」、ジョルジョ・ヴァザーリ、美術家列伝、森田義之、越川倫明、甲斐教行、宮下規久朗、高梨光正監修、第 4 巻、中央公論美術出版、2016 年、19－79、89－100、167－190、全 516 頁

③ 飛ヶ谷潤一郎、ピーナ・ラジョニエーリ、ピエトロ・ルスキ、小佐野重利責任編集、ミケランジェロ展、展覧会カタログ、山梨、東京、広島、2016 年、全 244 頁

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
・国際共同研究
① 飛ヶ谷潤一郎 （招待講演）“The Concept of the Gardens in Filarete’s Treatise on Architecture”, *Gardens: History, Reception, and Scientific Analyses* 2019 年 2 月 24 日、名古屋大学（名古屋市）

② 飛ヶ谷潤一郎 （招待講演）“Villa and Garden of the Italian Renaissance” 2018 年 6 月 21 日、安徽建築大学（中国、合肥市）

・国内シンポジウム
① 飛ヶ谷潤一郎 （基調講演）ヨーロッパの建築におけるクラシック、日・EU フレンドシップウィーク 2018 講演会、2018 年 6 月 13 日、東北大学（仙台市）

② 飛ヶ谷潤一郎 遠藤彩瑛、中島康雄、加藤諭、（パネルディスカッション）建築の対外交流にみるモデルとオリジナル、日・EU フレンドシップウィーク 2018 講演会、2018 年 6 月 13 日、東北大学（仙台市）

③ 飛ヶ谷潤一郎 （基調講演）ミケランジェロの建築に見る古代との闘い、2016 年 8 月 5 日、パナソニック汐留ミュージアム（東京都港区）

６．研究組織
(1)研究分担者
研究分担者氏名：
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8 桁）：

⑵研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。